

# Bookstart Newsletter



2021  
春  
No.72

ブックスタート・ニュースレター



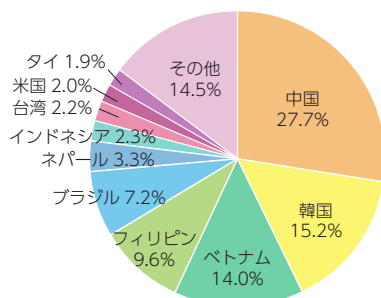
栃木県野木町

特集

## 外国人親子をサポートということ

現在の日本社会において、外国人居住者は共に暮らす隣人です。その数は、2019年末に約293万人と、前年末に比べ約20万人(7.4%)増えました。また、国籍の多様化も進んでいます。1988年には全体の約7割が韓国・朝鮮でしたが、2019年には中国、韓国、ベトナム、フィリピン、ブラジルの5か国を合わせて約7割です。

在留外国人の国籍・地域別内訳



出入国在留管理庁「令和元年末現在における在留外国人数について」(2020)

親が外国人(父母ともに外国人、および父母のいずれかが外国人の合計)の子どもの出生数も増えていきます。2019年には3万5730人で、総出生数(88万3566人)に占める割合は4.0%、25人に1人となっています。1987年の1.3%からおよそ3倍に増えました※1。

※1厚生労働省「人口動態統計」

(2019・1987)

次ページへつづく

多様な言語や文化を背景とする外国人親子にも、絵本のひとときの楽しさを届けるために、何ができるでしょうか。外国人居住者に関する様々な調査結果や専門家からのアドバイスをもとに、サポートする際に必要な配慮について考えてみました。また、当法人が作成している「多言語対応 絵本紹介シート」の改訂ポイントもご紹介します。



### 母語を尊重するサポートを

外国人も、日本に住んでいるのだから日本語を覚えた方がよいという、善意の思いを持つ日本人は多いかもしれませんが、外国につながる子ども

の中には、母語の獲得が不十分なまま成長することで、抽象的概念の理解や深い思考が難しくなるケースがあります。また、日本語に不慣れな親と、日本語しかわからない子どもの間で、深い会話ができず、親子関係に亀裂が生じる場合もあります。ましてや、母国を離れ、言葉や文化の異なる日本で子育てをしている外国人保護者。その苦労はわかりません。

赤ちゃん絵本は、ひらがなの短い文で書かれているため、外国人にとって、日本語で読むことは難しくないかもしれませんが。とはいえ、母語でも自由に絵本を楽しんでほしいと、親子に伝えることは大切です。保護者が少しでも安心して無理なく我が子と過ごせるよう、ブックスタートにおいてもサポートする必要があります。

### 外国人には英語が万能？「やさしい日本語」の活用

外国人に会った時に、つい「英語で話しかけなければ」と思うことはないでしょうか。前述した外国人居住者数上位10の国籍・地域の公用語は、9言語と様々です。外国人居住者を対象とした調査(※2)をみても、日常生活に困らない程度以上に日本語で会話がで



きると答えた人は、82.2%ののばりです。

一方、公的な文章などを理解することは、日本語がある程度話せる外国人であっても難しい場合があります。そこで活用できるのが「やさしい日本語」です。

「やさしい日本語」とは、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです。1995年の阪神・淡路大震災の際に、外国人へ情報が迅速に伝わらなかつたことから研究が始まりました。現在では、災害などの情報伝達の手段だけでなく、平時においても外国人、高齢者

障害者など、多くの人にとってわかりやすく情報を伝える手段として注目されています。「希望する情報発信言語」として「やさしい日本語」を挙げた外国人が76%いるという調査もあり、当事者のニーズも高いようです。(※3)

\* \* \*

では実際に、ブックスタートで出会う外国人親子に対し、私たちはどのようなサポートができるのでしょうか。専門家からお話を伺いました。

※2 法務省委託調査研究事業「外国人住民調査報告書」(2017)

※3 東京都国際交流委員会「東京都在住外国人向け情報伝達に関するヒアリング調査報告書」(2018)





専門家から

外国人保護者の「生の声」を聞いてほしい

東京外国語大学 多言語多文化共生センター 准教授 小島 祥美さん



こじまよしみ・小学校教員、NGO職員を経て、岐阜県可児市教育委員会の初代外国人児童生徒コーディネーターに抜擢。その後、全国各地の自治体の外国人教育にかかわる委員を歴任。文部科学省「外国人児童生徒等教育アドバイザー」の一人。

子育てを楽しむための情報が  
入手できない現実

私は長年、外国につながる子どもの就学問題について、主に東海地域の自治体とともに取り組んできました。プライベートでは、5歳になる子どもの親として、多くの外国人保護者と「ママ友」としてお付き合いをしています。

外国人保護者との会話を通して感じるのは、わざわざ行政の窓口に行つて質問するまでもないような、ちょっとした子育てに関する話題を話せる環境が、身近にないということです。日本人ならネットで検索したり、ご近所のつながりで簡単に入手できる情報が手に入らないのです。近頃、多言語での情報発信に取り組んでいる自治体も増えていますが、ゴミ出しに関する情報など、外国人に地域のルールを伝えるものばかり。子育てに役立つ講座や施設の案内は、日本語で書かれていることがほとんどです。ですから外国人保護者は、そうした機会や場所があることを知らないし、もし知っていたとしても、自分たちは行つてはいけなところだと思つています。外国人保護者も日本人と同じように、子育てを楽しむための情報を求めています。

知恵を享受しあえば心も地域も豊かになる

一方、外国人保護者から、その国ならではの子育ての知恵を教えてもらうことも多くあります。例えば、南米ペルー出身の保護者から聞いた、おむつを早く無理なく取る方法はとても役に立ちました。私が今、楽しく子育てをしているのも、外国人のママ友を通して、子育てには色々な方法があると、知ることができたからかもしれません。

私たちは、外国人への対応について、ともすると日本人が「してあげる」という一方通行の支援を考えがちです。しかし、それぞれの国で培われてきた知恵やノウハウを享受しあうことができれば、お互いの心を豊かにするばかりか、地域社会にとつての豊かさにもつながるのではないのでしょうか。

「ややつく日本語」で直接話しかけて

絵本は、その国の文化や歴史、価値観が凝縮されたものです。ですから、絵本が異文化理解のツールにもなり得ます。

またブックスタートでは、地域の人が親子と直接会話ができる、絶好の機会をお持ちです！

その際には「あなたの国ではどんな絵本がありますか？」など、外国人保護者の声をぜひ聞いていただきたいのです。そうすることで、課題や次に取り組むべきことが見えてくることでしょうか。子育ての悩みなどにも耳を傾けてほしいです。

対面だからこそ、多言語にこだわる必要はありません。「やさしい日本語」で十分に伝わります。同じ地域の人どうしが話すことに大きな意味があるのです。特に今はコロナ禍で、母国にも帰れず、情報もなく、以前にも増して日本社会から取り残されている外国人親子が多いのですから。

最初の一步が地域の未来を作る

近年自治体では、来日して間もないなど、日本語がわからない子どもを対象とした、日本語初期指導教室の設置が進んでいます。そこで出会う先生や日本人住民の良い印象は、その後の子どもたちに大きな影響を与えます。実際に、長年そうした取り組みを続けている自治体では、子どもたちが親になった時、またその地域に戻つて子育てをし、納税者になって暮らす外国人住民が増えています。

子どもたちが最初の一步を踏み出す際に出会った大人との関わりは、長い目で見ると、地域づくりにもつながります。そうした意味でもブックスタートは、親子が地域と接点を持つきっかけとして、機能するのではと期待しています。



# 外国人親子が絵本をより楽しむために 多言語対応 絵本紹介シート

当法人ウェブサイトから  
ダウンロード  
(無料) できます！  
\*当法人取引自治体向け

をご活用ください！

当法人では、「ブックスタート赤ちゃん絵本※4」を外国人親子にも楽しんでもらおうと、30タイトルすべてについて「多言語対応 絵本紹介シート」を作成しています。2021年度からの提供タイトルの変更に伴い、資料全体をリニューアルしました。改訂にあたっては、東京外国語大学の「言語文化サポーター※5」が翻訳などに協力。同大学の小島祥美先生からのアドバイスも参考にしています。

- ※4 自治体のブックスタート事業で手渡される絵本の候補として、3年ごとに開催される「絵本選考会議」で選ばれた30タイトルの絵本。
- ※5 一定の言語能力がある卒業生などが登録。社会貢献の一環として、多文化共生に寄与する活動を行っている。

全30タイトル  
(各A4サイズ3ページ)



絵本に書かれている日本語のうち、擬音語・擬態語などわかりにくい部分を補足。やさしい日本語を意識した文章を記載しました。

小島先生：外国人保護者にとっては「日本語では飛びの様子を“ぴょん”と言うのか」など、新たな発見にもつながりそうです。母語と併せてやさしい日本語があることで、より多くの方が理解しやすいと思います。

新たにネパール語を追加。9言語に対応しています。



日本語の絵本を母語でも自由に楽しんでほしいという前提を伝えています。

日本語で読みたい保護者へのサポートとして、各言語の発音に合わせたアルファベット表記を採用しています。

小島先生：例えば、「はははは」と読みたい時、ローマ字の「ha」を「ja」と表記しないと「は」と読めない言語もあります。きめ細やかなサポートになるでしょう。

## 自治体担当者の声

お父さんは日本語が話せるけれど、お母さんとお兄ちゃんは不慣れというご家族が来たことがありました。お父さんに説明して資料をお渡ししたら、「助かります。ありがとうございます」と喜んでくれました。(茨城県牛久市)

## 小島先生より

外国人保護者にとって、絵本がもらえるだけでなく、母語の資料が手渡されるのは、本当に嬉しいことだと思います。自分たちが地域に受け入れられている、我が子の誕生を一緒に祝ってくれている、そうしたことも感じてもらえそうです。

## ことのは

NPOブックスタートのスタッフが出合った言葉

幼い頃の幸福な思い出のひとつに、「盗みさわられ」があります。

『手の倫理』(伊藤亜紗著・講談社)より

電車で揺られ、うとうと眠る自分の体をそっとなでる母の手。柔らかいさわわり心地をひたすら味わうかのような手の動きに、著者の伊藤さんは、自分がまるごと肯定されているような喜びを感じ、寝たフリを続けて、「盗みさわられ」ていたそうです。「ふれる」と「さわる」を比較考察しながら、信頼によって許された「ふれる」行為からは、生成的なコミュニケーションが生み出されると語る伊藤さん。ふれることに慎重になりがちなの頃ですが、そこから育まれる細やかな関係性を大切にしたいと思いました。